

大学生の学習活動に影響する認知的変数について

0807070

矢木 芳堯

【目的】

太田ら(2003a)によると学習活動に影響する認知的変数を取り上げる意義は3点あり、①大学進学率に伴う問題に介入するため②受験勉強といった学習経験が大学での学習活動に及ぼす影響を理解するため③生涯学習社会のもと大学生の学習観を再構築する必要があるためとされていることから学習者の認知的変数の検討を行うことは有用であると考えられる。そこで本研究においては大学生の学習活動に影響する認知的変数として、太田ら(2003a)、太田ら(2003b)で用いられた「基本的学習観尺度」・「学習動機尺度」・「学習態度尺度」の3尺度を用い、それぞれの尺度の構造を明らかにしたうえで、情緒面に注目し「学習態度」が「基本的学習観」・「学習動機」からいかなる影響を受けているかを検討し、認知的変数が生じるメカニズムに関して明らかにすることを目的とする。

【方法】

被験者:大学生128名(男性30名,女性98名,無記名0名)。手続き:大学の講義時間に、質問紙を用いて調査を行った。調査時期は2010年10月下旬から11月上旬であった。質問紙の内容:①フェイスシート②市川(1995)が作成した学習動機尺度③太田ら(2003a)が作成した学習態度尺度④堀野,市川(1993)が作成した基本的学習観尺度を使用した。

【結果と考察】

はじめに各項目について天井効果と床効果があるかを検証したところ、学習動機尺度の3項目、学習態度尺度の2項目について天井効果が見られたため、今後の分析では除くこととした。

次に「学習動機尺度」「学習態度尺度」「基本的学習観尺度」の3尺度の構造を明らかにするため因子分析を行った結果、学習動機尺度では「外発的動機付け因子」「内発的動機付け因子」の2因子が、学習態度尺度では「自信欠如因子」「積極的な態度因子」の2因子が、基本的学習観尺度では「過程重視因子」「結果固執因子」「あ

きらめやすさ因子」の3因子が抽出された。

次に因果関係の検討に先立ち、学習態度尺度の先行要因間の相関関係を相関分析により検討した結果、内発的な学習動機はポジティブな学習観と正の相関を示し、外発的な学習動機はネガティブな学習観と正の相関を示した。目的もなく入学した者は学習自体に興味がないため知識を詰め込む勉強法を選択し、目的が明確である者は、学びたいことがあるからこそ自然と学習内容に深く関与する勉強法を選択するではないかと推測する。

次に基本的学習観と学習動機のあり方が学習態度を説明できるとの仮定に基づくモデルにより検討するため重回帰分析を行った結果、ポジティブな学習観と内発的な学習動機付けは積極的な学習態度に影響を与え、ネガティブな学習観と外発的な学習動機付けは消極的な学習態度に影響を与えていた。ポジティブな学習観と内発的動機付けがあつて積極的な学習態度が生起し、一方ネガティブな学習観と外発的な動機付けがあると消極的な学習態度が生起するといえるだろう。

最後に重回帰分析によるパス解析を用いて先行要因間の関連について検討をした結果、内発的動機付けとポジティブな学習観は積極的な学習態度や自信を持って学習できる態度へと結びつくが、内発的動機付けが外発的動機付けに影響を及ぼすことで自信に欠けた態度や非積極的な態度につながるという結果が得られた。また自信がないような消極的な態度を改善するにはプロセスに興味を持ち学生の知的好奇心を引き出すような授業をすることが重要だと考えられる。一方、学生に対して積極的な態度を生起させるためにはネガティブな学習観を持っている学生に対して、教師などの周りの環境が働きかけることが重要であると考えられる。環境に影響されることにより内発的動機付けが高まって積極的な態度につながることを期待される。

(指導教員 豊村 和真 教授)